

安珍は、男を大斎原の正門まで案内すると、そこで、別れを告げた。

男は、丁寧な礼を言う……。

どういふ素性のものかは知らないけれど……こんな病気にかからなければ、しっかりとした家柄のものであるのかもしれない。

手助けが、出来てよかったと安珍は思った。

……と、思った瞬間、喧嘩が起きた……。

さきほど、別れたはずの男が、二人の僧兵に六尺棒で抑えられている……。

「頼む。どうか……このわしにも、熊野の神の御慈悲を与えて下され！」

男は、地べたに頭をこすりつけている……。

「いかん！貴様のように穢れたものが……この聖地に、足を踏み入れる事は、ならん！」

僧兵達は、言いながら、男の頭を、棒で小突いた……。

安珍は、カッと頭に血が上った。

僧兵達の前にしゃしゃり出ると……僧兵達の持った棒を踏み付けた……。

「何をする！」

僧兵達が怒鳴る。

「何をするとは、こちらの台詞だ！」

安珍は、怒鳴り返した。

「無抵抗の者を、棒で叩くとは……おまえ達は……何のつもりだ！」

「我等は、熊野別当家に支えし者……別当家に代わりて、この熊野坐神を、守っておる。……この月は、前別当増慶様の亡くなられて3年の節目……この社殿を穢す事は許さぬ……控えい！」

僧兵共は、居丈高に言い放った。

「熊野の神は、淨・不淨を嫌わず、受け入れると聞く……。だからこそ、不自由な身体で救いを求め……。苦難の道を歩いて来るものがあるのだ……。たとえ、別当家のものとて、それを阻む権利はない！」

「何っ！」

「きさま……当家を、愚弄する気か！」

安珍は、朗々と弁舌を振るう……。

「この者は、一人にして、一人ではない……。この者が、この御山に辿り着くまで、どれだけの人に、助けられてきたか、支えられてきたのか……。考えた事があるか？」

安珍は……旅人達に、甲斐甲斐しく世話を焼いていた清姫の姿を脳裏に思い浮かべている……。

「この者を阻むという事は、それらの者達の思い……。全てを阻むという事なのだぞ……。」

「ええい……。だまれえ！説教など聞く耳もたんわ！」

言葉ではかなわないと思ったのだろうか……。僧兵の一人が、六尺棒を振り上げ、安珍に殴りかかろうとする……。瞬間、安珍は、相手の懐に、すっと入って間合いを殺し……。強烈な足払いを食らわせた……。

同時に、相手の手から、六尺棒を奪い取っている……。